# うたかたの記

森鷗外

## 上

幾頭の獅子（しし）の挽（ひ）ける車の上に、勢（いきおい）よく突立ちたる、女神（にょしん）バワリアの像は、先王ルウドヰヒ第一世がこの凱旋門（がいせんもん）に据（す）ゑさせしなりといふ。その下（もと）よりルウドヰヒ町を左に折れたる処に、トリエント産の大理石にて築（きず）きおこしたるおほいへあり。これバワリアの首府に名高き見ものなる美術学校なり。校長ピロッチイが名は、をちこちに鳴りひびきて、独逸（ドイツ）の国々はいふもさらなり、新希臘（ギリシア）、伊太利（イタリア）、璉馬（デンマーク）などよりも、ここに来（きた）りつどへる彫工（ちょうこう）、画工数を知らず。日課を畢（お）へて後（のち）は、

学校の向ひなる、「カッフェエ・ミネルワ」といふ店に入りて、珈琲（カッフェー）のみ、酒くみかはしなどして、おもひおもひの戯（たわぶれ）す。こよひも瓦斯燈（ガスとう）の光、半ば開きたる窓に映じて、内には笑ひさざめく声聞ゆるをり、かどにきかかりたる二人あり。

先に立ちたるは、かち色の髪（かみ）のそそけたるを厭（いと）はず、幅広き襟飾（えりかざり）斜（ななめ）に結びたるさま、誰（た）が目にも、ところの美術諸生（しょせい）と見ゆるなるべし。立（た）ち住（どま）りて、後（あと）なる色黒き小男に向ひ、「ここなり」といひて、戸口をあけつ。

先づ二人が面（おもて）を撲（う）つはたばこの烟（けぶり）にて、遽（にわか）に入りたる目には、中（なか）なる人をも見わきがたし。日は暮れ

たれど暑き頃なるに、窓悉(ことごと)くあけ放(はな)ちはせで、かかる烟の中に居るも、習(ならい)となりたるなるべし。「エキステルならずや、いつの間にか帰りし。」「なほ死なでありつるよ。」など口々に呼ぶを聞けば、彼(かの)諸生はこの群(むれ)にて、馴染(なじみ)あるものならむ。その間、あたりなる客は珍らしげに、後につきて入来(いりきた)れる男を見つめたり。見つめらるる人は、座客(ざかく)のなめなるを厭ひてか、暫(しば)し眉根(まゆね)に皺(しわ)寄せたりしが、とばかり思ひかへししにや、僅(わずか)に笑(えみ)を帯びて、一座を見度(みわた)しぬ。

この人は今着きし汽車にて、ドレスデンより来にければ、茶店(ちゃみせ)のさまの、かしことここと殊(こと)なるに目を注

ぎぬ。大理石の円卓(まるづくえ)幾つかあるに、白布(しらぬの)掛けたるは、夕餉(ゆうげ)畢りし迹(あと)をまだ片附けざるならむ。裸なる卓に倚(よ)れる客の前に据ゑたる土やきの盃(さかずき)あり。盃は円筒形(えんとうがた)にて、燗徳利(かんどくり)四つ五つも併せたる大(おおい)さなるに、弓なりのとり手つけて、金蓋(かなふた)を蝶番(ちょうつがい)に作りて覆(おお)ひたり。客なき卓に珈琲碗(わん)置いたるを見れば、みな倒(さかしま)に伏せて、糸底(いとぞこ)の上に砂糖、幾塊(いくかたまり)か盛れる小皿載せたるもをかし。

客はみなりも言葉もさまざまなれど、髪もけづらず、服も整(ととの)へぬは一様なり。されどあながち卑しくも見えぬは、さすが芸術世界に遊べるからにやあるらむ。

中にも際立ちて賑しきは中央なる大卓を占めたる一群なり。よそには男客のみなるに、独ここには少女あり。今エキステルに伴はれて来し人と目を合はせて、互に驚きたる如し。

　来し人はこの群に珍らしき客なればにや。また少女の姿は、初めて逢ひし人を動かすに余あらむ。前庇広く飾なき帽を被ぶりて、年は十七、八ばかりと見ゆる顔ばせ、ヱヌスの古彫像を欺けり。そのふるまひには自ら気高き処ありて、かいなでの人と覚えず。エキステルが隣の卓なる一人の肩を拍ちて、何事をか語ゐたるを呼びて、「こなたには面白き話一つする人

なし。この様子にては骨牌（カルタ）に遁（のが）れ球突（たまつき）に走るなど、忌（いま）はしき事を見むも知られず。おん連れの方と共に、こなたへ来たまはずや。」と笑みつつ勧（すす）むる、その清きに、いま来し客は耳傾（かたぶ）けつ。

「マリイの君のゐ玉ふ処へ、誰（たれ）か行かざらむ。人々も聞け、けふこの『ミネルワ』の仲間に入れむとて伴（ともな）ひたるは、巨勢（こせ）君とて、遠きやまとの画工なり。」とエキステルに紹介せられて、随来（したがいき）ぬる男の近寄りて会釈（えしやく）するに、起（た）ちて名告（なの）りなどするは、外国人（とつくにびと）のみ。さらぬは坐したるままにて答ふれど、侮（あなど）りたるにもあらず、この仲間の癖（くせ）なるべし。

エキステル、「わがドレスデンなる親族(みうち)訪(たず)ねにゆきしは人々も知りたり。巨勢君にはかしこなる画堂にて逢ひ、それより交(まじわり)を結びて、こたび巨勢君、ここなる美術学校に、しばし足を駐(とど)めむとて、旅立ち玉ふをり、われも倶(とも)にかへり路(じ)に上りぬ。」人々は巨勢に向ひて、はるばる来(き)ぬる人と相識(あいし)れるよろこびを陳(の)べ、さて、「大学にはおん国人(くにびと)も、をりをり見ゆれど、美術学校に来たまふは、君がはじめなり。けふ着きたまひしことなれば、『ピナコテエク』、また美術会の画堂なども、まだ見玉はじ。されどよそにて見たまひし処にて、南独逸(ドイツ)の画(え)を何とか見たまふ。こたび来たまひし君が

目的は奈何（いかに）。」など口々に問ふ。マリイはおしとどめて、「しばしばし、かく口を揃（そろ）へて問はるる、巨勢君とやらむの迷惑、人々おもはずや。聞かむとならば、静まりてこそ。」といふを、「さても女主人（おみなあるじ）の厳しさよ、」と人々笑ふ。巨勢は調子こそ異様（ことざま）なれ、拙（つたな）からぬ独逸語にて語りいでぬ。

「わがミュンヘンに来（こ）しは、このたびを始（はじめ）とせず。六年（むとせ）前にここを過ぎて、索遜（ザクセン）にゆきぬ。そのをりは『ピナコテエク』に懸けたる画を見しのみにて、学校の人々などに、交を結ぶことを得ざりき。そは故郷を出でし時よりの目あてなるドレスデンの画堂へ往（ゆ）かむと、心

のみ急がれしゆゑなり。されど再びここに来て、君らがまとゐに入ることとなりし、その因縁（いんねん）をば、早く当時に結びぬ。」

「大人気（おとなげ）なしといひけたで聞き玉へ。謝肉（しゃにく）［＃「謝肉」の左に「カルネワル」とルビ、42-14］の祭、はつる日の事なりき。『ピナコテエク』の館（やかた）出でし時は、雪いま晴れて、街（ちまた）の中道（なかみち）なる並木の枝は、一（ひと）つ一（びと）つ薄き氷にてつつまれたるが、今点ぜし街燈に映じたり。いろいろの異様なる衣（ころも）を着て、白くまた黒き百眼（ひゃくまなこ）掛けたる人、群をなして往来（ゆきき）し、ここかしこなる窓には毛氈（もうせん）垂れて、物見としたり。カルルの辻（つじ）なる『カッフエエ・ロリア

ン』に入りて見れば、おもひおもひの仮装色を争ひ、中に雑(まじ)りし常の衣もはえある心地(ここち)す。みなこれ『コロッセウム』、『ヰクトリア』などいふ舞踏場のあくを待てるなるべし。」

かく語る処へ、胸当(むねあて)につづけたる白前垂(まえだれ)掛けたる下女(はしため)、麦酒(ビール)の泡だてるを、ゆり越すばかり盛りたる例の大杯(おおさかずき)を、四つ五つづつ、とり手を寄せてもろ手に握りもち、「新しき樽(たる)よりとおもひて、遅(おそ)うなりぬ。許したまへ」とことわりて、前なる杯飲みほしたりし人々にわたすを、少女、「ここへ、ここへ」と呼びちかづけて、まだ杯持たぬ巨勢が前にも置かす。巨勢は一口飲

みて語りつづけぬ。
「われも片隅なる一榻(いっとう)に腰掛けて、賑はしきさま打見るほどに、門(かど)の戸あけて入(い)りしは、きたなげなる十五ばかりの伊太利(イタリア)栗(ぐり)うりにて、焼栗盛りたる紙筒(かみづつ)を、堆(うずたか)く積みし箱かいこみ、『マロオニイ、セニョレ。』(栗めせ、君)と呼ぶ声も勇ましき、後につきて入りしは、十二、三と見ゆる女(おみな)の子(こ)なりき。旧(ふる)びたる鷹匠頭巾(たかじょうずきん)[#「鷹匠頭巾」の左に「カプウチエ」とルビ、43-14]、ふかぶかと被(かぶ)り、凍(こご)えて赤うなりし両手さしのべて、浅き目籠(めご)の縁(ふち)を持ちたり。目籠には、常盤木(ときわぎ)の葉、敷き重ねて、その上に時ならぬ菫花(すみれ)の束を、愛らしく

結びたるを載せたり。『ファイルヘン、ゲフェルリヒ』（すみれめせ）と、うなだれたる首（こうべ）を擡（もた）げもあへでいひし声の清さ、今に忘れず。この童（わらべ）と女の子と、道連れとは見えねば、童の入るを待ちて、これをしほに、女の子は来しならむとおもはれぬ。」

「この二人のさまの殊（こと）なるは、早くわが目を射（い）き。人を人ともおもはぬ、殆（ほとんど）憎げなる栗うり、やさしくいとほしげなるすみれうり、いづれも群（むれ）ゐる人の間を分けて、座敷の真中（まなか）、帳場（ちょうば）の前あたりまで来し頃、そこに休みゐたる大学々生らしき男の連れたる、英吉利種（イギリスだね）の大狗（おおいぬ）、いままで腹這（はらば）ひてゐたりしが、身を起して、

背をくぼめ、四足（よつあし）を伸ばし、栗箱に鼻さし入れつ。それと見て、童の払ひのけむとするに、驚きたる狗、あとに附きて来し女の子に突当れば、『あなや、』とおびえて、手に持ちし目籠とり落したり。茎（くき）に錫紙（すずがみ）巻きたる、美しきすみれの花束、きらきらと光りて、よもに散りぼふを、好（よ）き物得つと彼（かの）狗、踏みにじりては、嚙（くわ）へて引きちぎりなどす。ゆかは暖炉（だんろ）の温（ぬく）まりにて解けたる、靴の雪にぬれたれば、あたりの人々、かれ笑ひ、これ罵（ののし）るひまに、落花狼藉（らっかろうぜき）、なごりなく泥土に委（ゆだ）ねたり。栗うりの童は、逸足出（いちあしいだ）して逃去り、学生らしき男は、欠（あく）びしつつ狗を叱（しっ）し、女の子は呆（あき）れて打守（うちまも）りたり。

この菫花うりの忍びて泣かぬは、うきになれて涙の泉涸れたりしか、さらずは驚き惑ひて、一日の生計、これがために已まむとまでは想到らざりしか。しばしありて、女の子は砕けのこりたる花束二つ三つ、力なげに拾はむとするとき、帳場にゐる女の知らせに、この主人出でぬ。赤がほにて、腹突きいだしたる男の、白き前垂したるなり。太き拳を腰にあてて、花売りの子を暫し睨み、『わが店にては、暖簾師［＃「暖簾師」の左側に「ハウジイレル」とルビ、45-5］めいたるあきなひ、せさせぬが定なり。疾くゆきね。』とわめきぬ。女の子は唯言葉なく出でゆくを、満堂の百眼、一滴

の涙なく見送りぬ。」

「われは珈琲代の白銅貨を、帳場の石板の上に擲(な)げ、外套(がいとう)取りて出でて見しに、花売の子は、ひとりさめざめと泣きてゆくを、呼べども顧(かえり)みず。追付きて、『いかに、善(よ)き子、菫花のしろ取らせむ、』といふを聞きて、始めて仰見(あおぎみ)つ。そのおもての美しさ、濃き藍(あい)いろの目には、そこひ知らぬ憂(うれい)ありて、一たび顧みるときは人の腸(はらわた)を断たむとす。嚢中(のうちゅう)の『マルク』七つ八つありしを、から籠(かご)の木(こ)の葉(は)の上に置きて与へ、驚きて何ともいはぬひまに、立去りしが、その面(おもて)、その目、いつまでも目に付きて消えず。ドレスデンにゆきて、画堂

の額（がく）うつすべき許（ゆるし）を得て、ヱヌス、レダ、マドンナ、ヘレナ、いづれの図に向ひても、不思議や、すみれ売のかほばせ霧の如（ごと）く、われと画額との間に立ちて障礙（しょうげ）をなしつ。かくては所詮（しょせん）、我業（わざ）の進まむこと覚束（おぼつか）なしと、旅店の二階に籠（こ）もりて、長椅子（ながいす）の覆革（おおいかわ）に穴あけむとせし頃もありしが、一朝（いっちょう）大勇猛心を奮（ふる）ひおこして、わがあらむ限（かぎり）の力をこめて、この花売の娘の姿を無窮（むきゅう）に伝へむと思ひたちぬ。さはあれどわが見し花うりの目、春潮を眺（なが）むる喜（よろこび）の色あるにあらず、暮雲を送る夢見心あるにあらず、伊太利（イタリア）古跡の間に立たせて、あたりに一群（ひとむれ）の白鳩（しろばと）飛ばせむこと、ふさはしからず。

我空想はかの少女（おとめ）をラインの岸の巌根（いわね）にをらせて、手に一張（ひとはり）の琴を把（と）らせ、嗚咽（おえつ）の声を出（いだ）させむとおもひ定めにき。下（した）なる流にはわれ一葉（いちよう）の舟を泛（うか）べて、かなたへむきてもろ手高く挙げ、面（おもて）にかぎりなき愛を見せたり。舟のめぐりには数知られぬ、『ニックセン』、『ニュムフェン』などの形波間（なみま）より出でて揶揄（やゆ）す。けふこのミュンヘンの府（ふ）に来て、しばし美術学校の『アトリエ』借らむとするも、行李（こり）の中、唯この一画藁（いちがこう）、これをおん身ら師友の間に議（はか）りて、成しはてむと願ふのみ。」

巨勢はわれ知らず話しいりて、かくいひ畢（おわ）りし時は、

モンゴリア形（がた）の狭き目も光るばかりなりき。「いしくも語りけるかな、」と呼ぶもの二人三人（ふたりみたり）。エキステルは冷淡に笑ひて聞（きき）ゐたりしが、「汝たちもその図見にゆけ、一週がほどには巨勢君の『アトリエ』ととのふべきに」といひき。マリイは物語の半（なかば）より色をたがへて、目は巨勢が唇にのみ注ぎたりしが、手に持ちし杯（さかずき）さへ一たびは震ひたるやうなりき。巨勢は初（はじめ）このまとゐに入りし時、已（すで）に少女の我すみれうりに似たるに驚きしが、話に聞きほれて、こなたを見つめたるまなざし、あやまたずこれなりと思はれぬ。こも例の空想のしわざなりや否（いな）や。物語畢りしとき、少女は暫

し巨勢を見やりて、「君はその後（のち）、再び花うりを見たまはざりしか、」と問ひぬ。巨勢は直（ただ）ちに答ふべき言葉を得ざるやうなりしが。「否。花売を見しその夕（ゆうべ）の汽車にてドレスデンを立ちぬ。されどなめなる言葉を咎（とが）め玉はずばきこえ侍（はべ）らむ。我すみれうりの子にもわが『ロオレライ』の画（え）にも、をりをりたがはず見えたまふはおん身なり。」

　この群は声高く笑ひぬ。少女、「さては画額ならぬ我姿と、君との間にも、その花うりの子立てりと覚えたり。我を誰とかおもひ玉ふ。」起ちあがりて、真面目（まじめ）なりとも戯（たわぶれ）なりとも、知られぬやうなる声にて。「わ

れはその菫花(すみれ)うりなり。君が情(なさけ)の報(むくい)はかくこそ。」少女は卓越(たくご)しに伸びあがりて、俯(うつむ)きゐたる巨勢が頭(かしら)を、ひら手にて抑へ、その額(ぬか)に接吻(せっぷん)しつ。

この騒ぎに少女が前なりし酒は覆(くつが)へりて、裳(もすそ)を浸(ひた)し、卓の上にこぼれたるは、蛇の如く這(は)ひて、人々の前へ流れよらむとす。巨勢は熱き手掌(たなぞこ)を、両耳の上におぼえ、驚く間もなく、またこれより熱き唇、額に触れたり。「我友に目を廻させたまふな。」とエキステル呼びぬ。人々は半ば椅子より立ちて「いみじき戯(たわぶれ)かな、」と一人がいへば、「われらは継子(ままこ)なるぞくやしき、」と外(ほか)の一人いひて笑ふを、よそなる卓よりも、皆興あ

りげにうち守(まも)りぬ。

少女が側(そば)に坐したりし一人は、「われをもすさめ玉はむや、」といひて、右手(めて)さしのべて少女が腰をかき抱きつ。少女は「さても礼儀知らずの継子どもかな、汝らにふさはしき接吻のしかたこそあれ。」と叫び、ふりほどきて突立ち、美しき目よりは稲妻(いなずま)出づと思ふばかり、しばし一座を睨(にら)みつ。巨勢は唯呆(あき)れに呆れて見ゐたりしが、この時の少女が姿は、菫花うりにも似ず、「ロオレライ」にも似ず、さながら凱旋門上のバワリアなりと思はれぬ。

少女は誰(た)が飲みほしけむ珈琲碗に添へたりし「コッ

プ」を取りて、中なる水を口に銜(ふく)むと見えしが、唯一噀(ひとふき)。
「継子よ、継子よ、汝ら誰(たれ)か美術の継子ならざる。フィレンチェ派学ぶはミケランジェロ、ヰンチイが幽霊、和蘭(オランダ)派学ぶはルウベンス、ファン・ヂイクが幽霊、我国のアルブレヒト・ドュウレル学びたりとも、アルブレヒト・ドュウレルが幽霊ならぬは稀(まれ)ならむ。会堂に掛けたる『スツヂイ』二つ三つ、値段(ねだん)好く売れたる暁(あかつき)には、われらは七星われらは十傑、われらは十二使徒と擅(ほしいまま)に見たてしてのわれぼめ。かかるえり屑(くず)にミネルワの唇いかで触れむや。わが冷たき接吻にて、満足せよ。」とぞ叫びける。

噴掛けし霧の下なるこの演説、巨勢は何事とも弁へねど、時の絵画をいやしめたる、諷刺ならむとのみは推測りて、その面を打仰ぐに、女神バワリアに似たりとおもひし威厳少しもくづれず、言畢りて卓の上におきたりし手袋の酒に濡れたるを取りて、大股にあゆみて出でゆかむとす。

皆すさまじげなる気色して、「狂人」と一人いへば、「近きに報せでは已まじ」と外の一人いふを、戸口にて振りかへりて。「遺恨に思ふべき事かは、月影にすかして見よ、額に血の迹はとどめじ。吹きかけしは水なれば。」

# 中

あやしき少女(おとめ)の去りてより、ほどなく人々あらけぬ。帰(かえ)り路(じ)にエキステルに問へば、「美術学校にて雛形(モデル)となる少女の一人にて、『フロイライン』ハンスルといふものなり。見たまひし如く奇怪なる振舞(ふるまい)するゆゑ、狂女なりともいひ、また外の雛形娘と違ひて、人に肌見せねば、かたはにやといふもあり。その履歴知るものなけれど、教(おしえ)ありて気象よの常ならず、汚(けが)れたる行(おこない)

なければ、美術諸生の仲間には、喜びて友とするもの多し。善(よ)き首(こうべ)なることは見たまふ如し。」と答へぬ。巨勢(こせ)、「我画かくにもようあるべきものなり。『アトリエ』ととのはむ日には、来(こ)よと伝へたまへ。」エキステル、「心得たり。されど十三の花売娘にはあらず、裸体の研究、危(あやう)しとはおもはずや。」巨勢、「裸体の雛形せぬ人と君もいひしが。」エキステル、「現(げ)にいはれたり。されど男と接吻したるも、けふ始めて見き。」エキステルがこの言葉に、巨勢は赤うなりしが、街燈暗き「シルレル・モヌメント」のあたりなりしかば、友は見ざりけり。巨勢が「ホテル」の前にて、二人は袂(たもと)を分ち

ぬ。

一週ほど後（のち）の事なりき。エキステルが周旋にて、美術学校の「アトリエ」一間（ひとま）を巨勢に借されぬ。南に廊下ありて、北面の壁は硝子（ガラス）の大窓（おおまど）に半（なかば）を占められ、隣の間とのへだてには唯帆木綿（ほもめん）の幌（とばり）あるのみ。頃はみな月半ばなれど、旅立ちし諸生多く、隣に人もあらず、業（わざ）妨ぐべき憂（うれい）なきを喜びぬ。巨勢は画額の架（だい）[#「架」の左に「スタッファージュ」とルビ、50-11]の前に立ちて、今入りし少女に「ロオレライ」の画を指さし示して、「君に聞かれしはこれなり。」面白げに笑ひたはぶれ玉ふときは、さしもおもはれねど、をりをり君がおも影

の、ここなる未成の人物にいとふさはしきときあり。」

少女は高く笑ひて。「物忘（ものわすれ）したまふな。おん身が『ロオレライ』の本（もと）の雛形、すみれ売の子は我なりとは、先の夜も告げしものを。」かくいひしが俄（にわか）に色を正して。「おん身は我を信じたまはず、げにそれも無理ならず。世の人は皆我を狂女なりといへば、さおもひたまふならむ。」この声戯（たわぶれ）とは聞えず。

巨勢は半信半疑したりしが、忍びかねて少女にいふ、
「余りに久しくさいなみ玉ふな。今も我が額（ぬか）に燃ゆるは君が唇なり。はかなき戯とおもへば、しひて忘れむとせしこと、幾度（いくたび）か知らねど、迷（まよい）は遂に晴れず。あは

れ君がまことの身の上、苦しからずは聞かせ玉へ。」
窓《まど》の下《もと》なる小机に、いま行李《こり》より出したる旧《ふる》き絵入新聞、遣《つか》ひさしたる油《あぶら》ゑの具《ぐ》の錫筒《すずづつ》、粗末なる烟管《キセル》にまだ巻烟草《まきタバコ》の端《はし》の残れるなど載せたるその片端に、巨勢はつら杖《づえ》つきたり。少女は前なる籐《とう》の椅子《いす》に腰かけて、語りいでぬ。
「まづ何事よりか申さむ。この学校にて雛形の鑑札受くるときも、ハンスルといふ名にて通したれど、そは我｜真《まこと》の名にあらず。父はスタインバハとて、今の国王に愛《め》でられて、ひと時栄《さか》えし画工なりき。わが十二の時、王宮の冬園《ふゆその》［＃「冬園」の左に「ヴィンテルガルテ

ン」とルビ、51-12］に夜会ありて、二親みな招かれぬ。宴闌（うたげたけなわ）なる頃、国王見えざりければ、人々驚きて、移植（うつしう）ゑし熱帯草木（そうもく）いやが上に茂れる、硝子（ガラス）屋根の下、そこかここかと捜しもとめつ。園（その）の片隅にはタンダルヂニスが刻（きざ）める、ファウストと少女との名高き石像あり。わが父のそのあたりに来たりし時、胸裂（さ）くるやうなる声して、『助けて、助けて』と叫ぶものあり。声をしるべに、黄金（こがね）の穹窿（まるてんじょう）おほひたる、『キオスク』(四阿屋（あずまや）)の戸口に立寄れば、周囲に茂れる椶櫚（しゅろ）の葉に、瓦斯燈（ガスとう）の光支へられたるが、濃き五色にて画きし、窓硝子を洩（も）りてさしこみ、薄暗くあやしげなる影をなし

たる裡（うち）に、一人の女の逃げむとすまふを、ひかへたるは王なり。その女のおもて見し時の、父が心はいかなりけむ。かれは我母なりき。父はあまりの事に、しばしたゆたひしが、『許したまへ、陛下（へいか）』と叫びて、王を推倒（おしたお）しつ。そのひまに母は走りのきしが、不意を打たれて倒れし王は、起き上りて父に組付きぬ。肥（こ）えふとりて多力なる国王に、父はいかでか敵し得べき、組敷かれて、側（かたわら）なりし如露（じょろ）にてしたたか打たれぬ。この事知りて諫（いさ）めし、内閣の秘書官チイグレルは、ノイシュワンスタインなる塔に押籠（おしこ）めらるるはずなりしが、救ふ人ありて助けられき。われはその夜家にありて、二

親の帰るを待ちしに、下女(はしため)来て父母帰り玉ひぬといふ。喜びて出迎ふれば、父昇(か)かれて帰り、母は我を抱きて泣きぬ。」

少女は暫(しば)らく黙しつ。けさより曇りたる空は、雨になりて、をりをり窓を打つ雫(しずく)、はらはらと音す。巨勢いふ。「王の狂人となりて、スタルンベルヒの湖に近き、ベルヒといふ城に遷(うつ)され玉ひしことは、きのふ新聞にて読みしが、さてはその頃よりかかる事ありしか。」

少女は語を継(つ)ぎて。「王の繁華の地を嫌ひて、鄙(ひな)に住まひ、昼寝ねて夜起きたまふは、久しきほどの事なり。独逸(ドイツ)、仏蘭西(フランス)の戦(いくさ)ありし時、加特力(カトリック)派の国会に打

勝ちて、普魯西（プロシヤ）方につきし、王が中年のいさをは、次第に暴政の噂（うわさ）に掩（おお）はれて、公けにこそ言ふものなけれ、陸軍大臣メルリンゲル、大蔵大臣リイデルなど、故なくして死刑に行はれむとしたるを、その筋にて秘めたるは、誰知らぬものなし。王の昼寝し玉ふときは、近衆（きんじゅう）みな却（しりぞ）けられしが、囈語（うわこと）にマリイといふこと、あまたたびいひたまふを聞きしもありといふ。我母の名もマリイといひき。望なき恋は、王の病を長ぜしにあらずや。母はかほばせ我に似たる処ありて、その美しさは宮の内にて類（たぐい）なかりきと聞きつ。」

「父は間もなく病みて死にき。交（まじわり）広く、もの惜（おし）みせ

ず、世事には極めて疎(うと)かりければ、家に遺財つゆばかりもなし。それよりダハハウエル街の北のはてに、裏屋の二階明きたりしを借りて住みしが、そこに遷りてより、母も病みぬ。かかる時にうつろふものは、人の心の花なり。数知らぬ苦しき事は、わが稚(おさな)き心に、早く世の人を憎ましめき。明(あく)る年の一月、謝肉祭の頃なりき、家財衣類なども売尽して、日々の烟(けぶり)も立てかぬるやうになりしかば、貧しき子供の群に入りてわれも菫花(すみれ)売ることを覚えつ。母のみまかる前、三日四日のほどを安く送りしは、おん身の賜(たまもの)なりき。」

「母のなきがら片付けなどするとき、世話せしは、一

階高くすまひたる裁縫師なり。あはれなる孤（みなしご）ひとり置くべきにあらずとて、迎取られしを喜びしこと、今おもひ出しても口惜（くや）しきほどなり。裁縫師には、娘二人ありて、いたく物ごのみして、みづから衒（てら）ふさまなるを見しが、迎取られてより伺（うかが）へば、夜に入りてしばしば客あり。酒など飲みて、はては笑ひ罵（ののし）り、また歌ひなどす。客は外国（とつくに）の人多く、おん国の学生なども見えしやうなりき。或る日主人（あるじ）われにも新しき衣（きぬ）着よといひしが、そのをりその男の我を見て笑ひし顔、何となく怖（おそ）ろしく、子供心にもうれしとはおもはざりき。午（ひる）すぎし頃、四十ばかりなる知らぬ人来て、スタルン

ベルヒの湖水へ往（ゆ）かむといふを、主人も倶（とも）に勧（すす）めき。父の世にありしきとき、伴はれてゆきし嬉しさ、なほ忘れざりしかば、しぶしぶ諾（うべな）ひつるを、「かくてこそ善（よ）き子なれ」とみな誉（ほ）めつ。連れなる男は、途（みち）にてやさしくのみ扱ひて、かしこにては『バワリア』といふ座敷船（ザロンダムフエル）に乗り、食堂にゆきて物食はせつ。酒もすすめぬれど、そは慣れぬものなれば、辞（いな）みて飲まざりき。ゼエスハウプトに船はてしとき、その人はまた小舟を借り、これに乗りて遊ばむといふ。暮れゆくそらに心細くなりしわれは、はやかへらむといへど、聴かずして漕出（こぎい）で、岸辺に添ひてゆくほどに、人げ遠き葦間（あしま）に

来(きた)りしが、男は舟をそこに停(と)めつ。わが年はまだ十三にて、初(はじめ)は何事ともわきまへざりしが、後(のち)には男の顔色もかはりておそろしく、われにてもあらで、水に躍入(おどりい)りぬ。暫しありて我にかへりしときは、湖水の畔(ほとり)なる漁師(りょうし)の家にて、貧しげなる夫婦のものに、介抱せられてゐたりき。帰るべき家なしと言張りて、一日(ひとひ)二日(ふたひ)と過(すぐ)す中(うち)に、漁師夫婦の質朴なるに馴染(なじ)みて、不幸なる我身の上を打明けしに、あはれがりて娘として養ひぬ。ハンスルといふは、この漁師の名なり。」

「かくて漁師の娘とはなりぬれど、弱き身には舟の櫂(かじ)取ることもかなはず、レオニのあたりに、富める

英吉利人(イギリスびと)の住めるに雇(やと)はれて、小間使(こまづかい)になりぬ。加特力教(カトリックきょう)信ずる養父母は、英吉利人に使はるるを嫌ひぬれど、わが物読むことなど覚えしは、彼(かの)家なりし雇女教師(やといじょきょうし)［＃「雇女教師」の左に「グェルナント」とルビ、55-10］の恵(めぐみ)なり。女教師は四十余の処女(しょじょ)なりしが、家の娘のたかぶりたるよりは、我を愛すること深く、三年(みとせ)がほどに多くもあらぬ教師の蔵書、悉(ことごと)く読みき。ひがよみはさこそ多かりけめ。またふみの種類もまちまちなりき。クニッゲが交際法あれば、フムボルトが長生術あり。ギョオテ、シルレルの詩抄半ばじゆしてキョオニヒが通俗の文学史を繙(ひもと)き、あるはルウヴル、

ドレスデンの画堂の写真絵、繰りひろげて、テエヌが美術論の訳書をあさりぬ。」

「去年(こぞ)英吉利人一族を率ゐて国に帰りし後は、然(しか)るべき家に奉公せばやとおもひしが、身元善(よ)からねば、ところの貴族などには使はれず。この学校の或る教師に、端(はし)なくも見出されて、雛形(モデル)勤めしが縁(えにし)になりて、遂に鑑札受くることとなりしが、われを名高きスタインバハが娘なりとは知る人なし。今は美術家の間に立ちまじりて、唯(ただ)面白くのみ日を暮せり。されどグスタアフ・フライタハはさすがそら言(ごと)いひしにあらず。美術家ほど世に行儀悪(あ)しきものなければ、独立(ひとりだ)ちて交(まじわ)る

には、しばしも油断すべからず。寄らず、障（さわ）らぬやうにせばやとおもひて、計（はか）らず見玉（みたま）ふ如き不思議の癖者（くせもの）になりぬ。をりをりは我身、みづからも狂人にはあらずやと疑ふばかりなり。これにはレオニにて読みしふみも、少（すこ）し祟（たたり）をなすかとおもへど、もし然（さ）らば世に博士と呼ばるる人は、そもそもいかなる狂人ならむ。われを狂人と罵る美術家ら、おのれらが狂人ならぬを憂へこそすべきなれ。英雄豪傑、名匠大家となるには、多少の狂気なくて愜（かな）はぬことは、ゼネカが論をも、シエクスピアが言（げん）をも待（ま）たず。見玉へ、我学問の博（ひろ）きを。狂人にして見まほしき人の、狂人ならぬを見る、

その悲しさ。狂人にならでもよき国王は、狂人になりぬと聞く、それも悲し。悲しきことのみ多ければ、昼は蟬（せみ）と共に泣き、夜は蛙（かわず）と共に泣けど、あはれといふ人もなし。おん身のみは情（つれ）なくあざみ笑ひ玉はじとおもへば、心のゆくままに語るを咎（とが）め玉ふな。ああ、かういふも狂気か。」

## 下

定（さだめ）なき空に雨歇（や）みて、学校の庭の木立（こだち）のゆるげる

のみ曇りし窓の硝子をとほして見ゆ。少女が話聞く間、巨勢が胸には、さまざまの感情戦ひたり。或ときはむかし別れし妹に逢ひたる兄の心となり、或ときは廃園に僵れ伏したるヱヌスの像に、独り悩める彫工の心となり、或るときはまた艶女に心動され、われは堕ちじと戒むる沙門の心ともなりしが、聞きをはりし時は、胸騒ぎ肉顫ひて、われにもあらで、少女が前に跪かむとしつ。少女はつと立ちて「この部屋の暑さよ。はや学校の門もささるる頃なるべきに、雨も晴れたり。おん身とならば、おそろしきこともなし。共にスタルンベルヒへ往き玉はずや。」と側なる帽取りて戴きつ。

そのさま巨勢が共に行くべきを、つゆ疑はずと覚し。巨勢は唯母に引かるる穉子の如く従ひゆきぬ。

門前にて馬車雇ひて走らするに、ほどなく停車場に来ぬ。けふは日曜なれど、天気悪しければにや、近郷よりかへる人も多からで、ここはいと静なり。新聞の号外売る婦人あり。買ひて見れば、国王ベルヒの城に遷りて、容体穏なれば、侍医グッデンも護衛を弛めさせきとなり。滊車中には湖水の畔にあつさ避くる人の、物買ひに府に出でし帰るさなるが多し。王の噂いと喧し。「まだホオヘンシュワンガウの城にゐたまひし時には似ず、心鎮まりたるやうなり。ベルヒ

に遷さるる途中、ゼエスハウプトにて水求めて飲みたまひしが、近きわたりなりし漁師らを見て、やさしく頷きなどしたまひぬ。」と訛みたることばにて語るは、かひもの籠手にさげたる老女なりき。

　車走ること一時間、スタルンベルヒに着きしは夕の五時なり。かちより往きてやうやう一日ほどの処なれど、はやアルペン山の近さを、唯何となく覚えて、このくもらはしき空の気色にも、胸開きて息せらる。車のあちこちと廻来し、丘陵の忽開けたる処に、ひろびろと見ゆるは湖水なり。停車場は西南の隅にありて、東岸なる林木、漁村はゆふ霧に包まれてほのかに

認めらるれど、山に近き南の方は一望きはみなし。案内（あない）知りたる少女に引かれて、巨勢は右手（めて）なる石段をのぼりて見るに、ここは「バワリア」の庭（ホオフ）といふ「ホテル」の前にて、屋根なき所に石卓（いしづくえ）、椅子（いす）など並べたるが、けふは雨後なればしめじめと人げ少し。給仕する僕（しもべ）の黒き上衣（うわぎ）に、白の前掛したるが、何事をかつぶやきつつも、卓に倒しかけたる椅子を、引起して拭（ぬぐ）ひゐたり。ふと見れば片側の軒（のき）にそひて、つた蔓（かずら）からませたる架（たな）ありて、その下（もと）なる円卓（まるづくえ）を囲みたるひと群（むれ）の客あり。こはこの「ホテル」に宿りたる人々なるべし。男女打ちまじりたる中に、先の夜「ミネルワ」

にて見し人ありしかば、巨勢は往きてものいはむとせしに、少女おしとどめて。「かしこなるは、君の近づきたまふべき群にあらず。われは年若き人と二人にて来たれど、愧(は)づべきはかなたにありて、こなたにあらず。彼はわれを知りたれば、見玉へ、久しく座にえ忍びあへで隠るべし。」とばかりありて、彼(かの)美術諸生は果して起(た)ちて「ホテル」に入りぬ。少女は僕を呼びちかづけて、座敷船はまだ出づべしやと問ふに、僕は飛行く雲を指さして、この覚束(おぼつか)なきそらあひなれば、最早(もはや)出(い)でざるべしといふ。さらば車にてレオニに行かばやとて言付けぬ。

馬車来ぬれば、二人は乗りぬ。停車場の傍(かたへ)より、東の岸辺を奔(はし)らす。この時アルペンおろしさと吹来て、湖水のかたに霧立ちこめ、今出でし辺(ほとり)をふりかへり見るに、次第々々に鼠色(ねずみいろ)になりて、家の棟(むね)、木のいただきのみ一きは黒く見えたり。御者ふりかへりて、「雨なり。母衣(ほろ)掩(おお)ふべきか。」と問ふ。「否(いな)」と応(こた)へし少女は巨勢に向ひて。「ここちよのこの遊(あそび)や。むかし我命喪(うしな)はむとせしもこの湖の中なり。我命拾ひしもまたこの湖の中なり。さればいかでとおもふおん身に、真心(まごころ)打明けてきこえむもここにてこそと思へば、かくは誘(さそ)ひまつりぬ。『カッフェエ・ロリアン』にて恥かし

き目にあひけるとき、救ひ玉はりし君をまた見むとおもふ心を命にて、幾歳（いくとせ）をか経にけむ。先の夜『ミネルワ』にておん身が物語聞きしときのうれしさ、日頃木のはしなどのやうにおもひし美術諸生の仲間なりければ、人あなづりして不敵の振舞（ふるまい）せしを、はしたなしとや見玉ひけむ。されど人生いくばくもあらず。うれしとおもふ一弾指（いちだんし）の間に、口張りあけて笑はずば、後にくやしくおもふ日あらむ。」かくいひつつ被（かぶ）りし帽を脱棄（ぬぎす）てて、こなたへふり向きたる顔は、大理石脈（だいりせきみゃく）に熱血跳（おど）る如くにて、風に吹かるる金髪は、首（こうべ）打振りて長く嘶（いば）ゆる駿馬（しゅんめ）の鬣（たてがみ）に似たりけり。「けふなり。けふ

なり。きのふありて何かせむ。あすも、あさても空（むな）しき名のみ、あだなる声のみ。」

この時、二点三点、粒太（つぶふと）き雨は車上の二人が衣（きぬ）を打ちしが、瞬（また）くひまに繁くなりて、湖上よりの横しぶき、あららかにおとづれ来て、紅（べに）を潮（さ）したる少女が片頬（かたほお）に打ちつくるを、さし覗（のぞ）く巨勢が心は、唯そらにのみやなりゆくらむ。少女は伸びあがりて、「御者、酒手（さかて）は取らすべし。疾（と）く駆（か）れ。一策（ひとむち）加へよ、今一策。」と叫びて、右手（めて）に巨勢が頸（うなじ）を抱（いだ）き、己（おの）れは項（うなじ）をそらせて仰視（あおぎみ）たり。巨勢は絮（わた）の如き少女が肩に、我頭（かしら）を持たせ、ただ夢のここちしてその姿を見たりしが、彼凱旋門（かのがいせんもん）上の女

神バワリアまた胸に浮びぬ。

国王の棲(す)めりといふベルヒ城の下(もと)に来(こ)し頃は、雨いよいよ劇(はげ)しくなりて、湖水のかたを見わたせば、吹寄する風一陣々、濃淡の竪縞(たてじま)おり出して、濃(こ)き処には雨白く、淡(あわ)き処には風黒し。御者は車を停めて、「しばしがほどなり。余りに濡(ぬ)れて客人(まろうど)も風や引き玉はむ。また旧(ふる)びたれどもこの車、いたく濡らさば、主人(あるじ)の嗔(いかり)に逢(あ)はむ。」といひて、手早く母衣打掩(うちおお)ひ、また一鞭(ひとむち)あてて急ぎぬ。

雨なほをやみなくふりて、神おどろおどろしく鳴りはじめぬ。路(みち)は林の間に入りて、この国の夏の日はま

だ高かるべき頃なるに、木下道(このしたみち)ほの暗うなりぬ。夏の日に蒸(む)されたりし草木の、雨に湿(うるお)ひたるかをり車の中に吹入るを、渇(かつ)したる人の水飲むやうに、二人は吸ひたり。鳴神(なるかみ)のおとの絶間(たえま)には、おそろしき天気に怯(おく)れたりとも見えぬ「ナハチガル」鳥の、玲瓏(れいろう)たる声振りたてててしばなけるは、淋しき路を独(ひとり)ゆく人の、ことさらに歌うたふ類(たぐい)にや。この時マリイは諸手(もろて)を巨勢が項に組合せて、身のおもりを持たせかけたりしが、木蔭を洩(も)る稲妻に照らされたる顔、見合せて笑(えみ)を含みつ。あはれ二人は我を忘れ、わが乗れる車を忘れ、車の外なる世界をも忘れたりけむ。

林を出でて、阪路（さかみち）を下るほどに、風村雲（むらくも）を払ひさりて、雨もまた歇（や）みぬ。湖の上なる霧は、重ねたる布を一重（ひとえ）、二重と剥（は）ぐ如く、束（つか）の間（ま）に晴れて、西岸なる人家も、また手にとるやうに見ゆ。唯ここかしこなる木下蔭を過（す）ぐるごとに、梢（こずえ）に残る露の風に払はれて落つるを見るのみ。

レオニにて車を下りぬ。左に高く聳（そばだ）ちたるは、いはゆるロットマンが岡にて、「湖上第一勝」と題したる石碑（せきひ）の建てる処なり。右に伶人（れいじん）レオニが開きぬといふ、水に臨（のぞ）める酒店（さかみせ）あり。巨勢が腕（かいな）にもろ手からみて、縋（すが）るやうにして歩みし少女は、この店の前に来て岡の

方をふりかへりて、「わが雇はれし英吉利人の住みしは、この半腹の家なりき。老いたるハンスル夫婦が漁師小屋も、最早百歩がほどなり。われはおん身をかしこへ、伴はむとおもひて来しが、胸騒ぎて堪へがたければ、この店にて憩はばや。」巨勢は現にもとて、店に入りて夕餉誂ふるに、「七時ならでは整はず、まだ三十分待ち給はではかなはじ、」といふ。ここは夏の間のみ客ある処にて、給仕する人もその年々に雇ふなれば、マリイを識れるもなかりき。

少女はつと立ちて、桟橋に繋ぎし舟を指さし、「舟漕ぐことを知り玉ふか。」巨勢、「ドレスデンにありし時、

公園のカロラ池にて舟漕ぎしことあり、善くすといふにあらねど、君独(ひと)りわたさむほどの事、いかで做得(なしえ)ざらむ。」少女、「庭なる椅子(いす)は濡(ぬ)れたり。さればとて屋根の下は、あまりに暑し。しばし我を載せて漕ぎ玉へ。」

　巨勢はぬぎたる夏外套(なつがいとう)を少女に被(き)せて小舟(おぶね)に乗らせ、われは櫂(かい)取りて漕出(こぎい)でぬ。雨は歇みたれど、天なほ曇りたるに、暮色は早く岸のあなたに来ぬ。さきの風に揺られたるなごりにや、梶敲(かじたた)くほどの波はなほありけり。岸に沿ひてベルヒの方(かた)へ漕ぎ戻すほどに、レオニの村落果つるあたりに来ぬ。岸辺の木立(こだち)絶えたる処に、

真砂路の次第に低くなりて、波打際に長椅子据ゑたる見ゆ。蘆の一叢舟に触れて、さわさわと声するをりから、岸辺に人の足音して、木の間を出づる姿あり。身の長六尺に近く、黒き外套を着て、手にしぼめたる蝙蝠傘を持ちたり。左手に少し引きさがりて随ひたるは、鬚も髪も皆雪の如くなる翁なりき。前なる人は俯きて歩み来ぬれば、縁広き帽に顔隠れて見えざりしが、今木の間を出でて湖水の方に向ひ、しばし立ちとどまりて、片手に帽をぬぎ持ちて、打ち仰ぎたるを見れば、長き黒髪を、後ざまにかきて広き額を露はし、面の色灰のごとく蒼きに、窪みたる目の光は人を

射たり。舟にては巨勢が外套を背に着て、蹲(うずく)まりゐたるマリイ、これも岸なる人を見ゐたりしが、この時俄(にわか)に驚きたる如く、「彼は王なり」と叫びて立ちあがりぬ。背なりし外套は落ちたり。帽はさきに脱ぎたるまま、酒店に置きて出でぬれば、乱れたるこがね色の髪は、白き夏衣(なつごろも)の肩にたをたをとかかりたり。岸に立ちたるは、実に侍医グッデンを引つれて、散歩に出でたる国王なりき。あやしき幻の形を見る如く、王は恍惚(こうこつ)として少女の姿を見てありしが、忽(たちまち)一声「マリイ」と叫び、持ちたる傘投棄てて、岸の浅瀬をわたり来ぬ。少女は「あ」と叫びつつ、そのまま気を喪(うしな)ひて、

巨勢が扶くる手のまだ及ばぬ間に僵れしが、傾く舟の一揺りゆらるると共に、うつ伏になりて水に墜ちぬ。湖水はこの処にて、次第々々に深くなりて、勾配ゆるやかなりければ、舟の停まりしあたりも、水は五尺に足らざるべし。されど岸辺の砂は、やうやう粘土まじりの泥となりたるに、王の足は深く陥いりて、あがき自由ならず。その隙に随ひたりし翁は、これも傘投捨てて追ひすがり、老いても力や衰へざりけむ、水を蹴て二足三足、王の領首むづと握りて引戻さむとす。こなたは引かれじとするほどに、外套は上衣と共に翁が手に残りぬ。翁はこれをかいやり棄てて、なほも王

を引寄せむとするに、王はふりかへりて組付き、かれこれたがひに声だに立てず、暫し揉合(もみあ)ひたり。

これ唯(ただ)一瞬間の事なりき。巨勢は少女が墜(お)つる時、僅(わずか)に裳(も)を握みしが、少女が蘆間隠れの杙(くい)に強く胸を打たれて、沈まむとするを、やうやうに引揚(ひきあ)げ、汀(みぎわ)の二人が争ふを跡に見て、もと来(こ)し方(かた)へ漕ぎ返しつ。巨勢は唯奈何(いか)にもして少女が命助けむと思ふのみにて、外(ほか)に及ぶに遑(いとま)あらざりしなり。レオニの酒店の前に来しが、ここへは寄らず、これより百歩がほどなりと聞きし、漁師夫婦が苫屋(とまや)をさして漕ぎゆくに、日もはや暮れて、岸には「アイヘン」、「エルレン」などの枝

繁りあひ広ごりて、水は入江の形をなし、蘆にまじりたる水草に、白き花の咲きたるが、ゆふ闇（やみ）にほの見えたり。舟には解けたる髪の泥水にまみれしに、藻屑（もくず）かかりて僵（たお）れふしたる少女の姿、たれかあはれと見ざらむ。をりしも漕来る舟に驚きてか、蘆間を離れて、岸のかたへ高く飛びゆく螢（ほたる）あり。あはれ、こは少女が魂（たま）のぬけ出でたるにはあらずや。

しばしありて、今まで木影（こかげ）に隠れたる苫屋の燈（ともしび）見えたり。近寄りて、「ハンスルが家はここなりや、」とおとなへば、傾きし簷端（のきば）の小窓開（あ）きて、白髪の老女（おうな）、舟をさしのぞきつ。「ことしも水の神の贄（にえ）求めつるよ。

主人(あるじ)はベルヒの城へきのふより駆(か)りとられて、まだ帰らず。手当(てあて)して見むとおもひ玉はば、こなたへ。」と落付きたる声にていひて、窓の戸ささむとしたりしに、巨勢は声ふりたてて、「水に墜ちたるはマリイなり、そなたのマリイなり、」といふ。老女は聞きも畢(おわ)らず、窓の戸を開け放ちたるままにて、桟橋(さんばし)の畔(ほとり)に馳出(はせい)で、泣く泣く巨勢を扶(たす)けて、少女を抱きいれぬ。

入りて見れば、半ば板敷にしたるひと間のみ。今火を点(とも)したりと見ゆる小「ランプ」竈(かまど)の上に微(かすか)なり。四方(よも)の壁にゑがきたる粗末なる耶蘇(ヤソ)一代記の彩色画は、煤(すす)に包まれておぼろげなり。藁火(わらび)焚(た)きなどして介抱し

ぬれど、少女は蘇（よみがえ）らず。巨勢は老女と屍（かばね）の傍（かたわら）に夜をとほして、消えて迹（あと）なきうたかたのうたてき世を喞（かこ）ちあかしつ。

　時は耶蘇暦千八百八十六年六月十三日の夕（ゆうべ）の七時、バワリア王ルウドヰヒ第二世は、湖水に溺（おぼ）れて殂（そ）せられしに、年老いたる侍医グッデンこれを救はむとて、共に命を殞（おと）し、顔に王の爪痕（そうこん）を留（とど）めて死したりといふ、おそろしき知らせに、翌（あくる）十四日ミュンヘン府の騒動はおほかたならず。街の角々には黒縁（くろぶち）取りたる張紙（はりがみ）に、この訃音（ふいん）を書きたるありて、その下には人の山をなしたり。新聞号外には、王の屍見出だしつるをりの模様

に、さまざまの臆説（おくせつ）附けて売るを、人々争ひて買ふ。点呼に応ずる兵卒の正服つけて、黒き毛植ゑたるバワリア鍪（かぶと）戴（いただ）ける、警察吏の馬に騎（の）り、または徒立（かちだち）にて馳（は）せちがひたるなど、雑沓（ざっとう）いはんかたなし。久しく民に面（おもて）を見せたまはざりし国王なれど、さすがにいたましがりて、憂（うれい）を含みたる顔も街に見ゆ。美術学校にもこの騒ぎにまぎれて、新（あらた）に入（いり）し巨勢がゆくへ知れぬを、心に掛くるものなかりしが、エキステル一人は友の上を気づかひゐたり。

六月十五日の朝（あした）、王の柩（ひつぎ）のベルヒ城より、真夜中に府に遷（うつ）されしを迎へて帰りし、美術学校の生徒が

「カッフェエ・ミネルワ」に引上げし時、エキステルはもしやと思ひて、巨勢が「アトリエ」に入りて見しに、彼はこの三日がほどに相貌（そうぼう）変りて、著（し）るく痩（や）せたる如く、「ロオレライ」の図の下に跪（ひざまず）きてぞゐたりける。

国王の横死（おうし）の噂（うわさ）に掩（おお）はれて、レオニに近き漁師ハンスルが娘一人、おなじ時に溺れぬといふこと、問ふ人もなくて已（や）みぬ。

底本：「舞姫・うたかたの記　他三篇」岩波文庫、岩波書店
　　１９８１（昭和56）年１月16日初版発行
　　１９９９（平成11）年７月15日36刷
底本の親本：「鴎外全集　第二巻」岩波書店
　　１９７１（昭和46）年12月初版発行
入力：よしだひとみ
校正：松永正敏
２０００年７月18日公開
２００６年５月15日修正
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。